

# せきぬ。(仮)

不定期ミニコミ通信『せきぬ。(仮)』

2013 10月20日 VOL.1

『何が目当てだ!創刊号?』

発行/せきぬ.制作委員会 twitter/@XXXXXX

## 赤い塗料

あれは確か、僕が小学校4年生の頃だったかと思えます。当時の小学生の間での流行といえば、やはりファミコンなどのゲーム類で、僕も毎日のように学校の友だちや幼稚園児の弟と家でファミコンをしたり、学校の近くの駄菓子屋のゲームコーナーでアーケードゲームをやったりして遊んでいました。

そんな時、僕の心を大きく動かす出来事があった。その駄菓子屋のゲームコーナーで起こりました。そのゲームコーナーにはゲーム機が3台あり、学校が終わるとみんなが集まってくる人気のスポットでした。3台の中でも常に群衆の支持を集めていたのは、『リアルカンフー』と『スバルタンX』の2台で、この2台は超ロングランヒットで、いつもゲーム機の前は人だかり。ゲームをやるには常に順番待ち状態。いわゆる駄菓子屋さんのドル箱です。ところが、対照的に残りの1台は駄作の連続。固定客がつかず、気がつくくとゲームの中身が変わっているという状況でした。

ある時、僕がその店に寄ると、また例のごとくその台には見た事もない新しいゲームが入っていました。お店のおばあちゃんの話だと今日入ったばかりだということで、僕は暇つぶし程度に考え、一回やってみるかと思いい、2枚持っていた50円玉のうち1枚を投入しました。ゲームの名前は、『エレベーターアクション』。ワンプレイやり終え、僕は思いました。なんだ、このゲームは……おもしろえ。

僕はすぐ残りの50円も使いもう一回やりました。今ではなぜだか分かりませんが、僕は、この『エレベーターアクション』に異常なほど興味を引かれていました。ああもつとこの『エレベーターアクション』がやりたい、と思いましたが、持っていた50円玉2枚は今日のおこづかいの最後の百円で、次のおこづかいをもらえる日は一週間後。一週間経つ間にゲームがまた変わらなことを祈りながら待ち続けました。

そして一週間後、奇跡的に『エレベーターアクション』は生き延びていました。しかし、どうしたことでしよう。みんなが『エレベーターアクション』の面白さに気づいてしまったのでしようか。ゲームコーナーの常連の高級生の人たちが、僕が発見したエレベーターアクションを占拠してのです。その後、『エレベーターアクション』は常に高級生に占拠され、僕はいつも斜め後ろくらいから背伸びしてゲーム画面を眺めているだけで、プレイさせてもらうことが出来ませんでした。

そんながっかりの僕に朗報が舞い込んできました。『エレベーターアクション』がファミコンに移植されるというのです。僕はそれを聞いてすぐに、エレベーターアクションは、『私の選ぶ・俺の次買っカセットコンテスト』の僕の欲しいゲーム部門大賞』に選ばれました。それから発売日までの日々は、おばあちゃんとお母さんの財布からお金を毎日気づかれぬくらいにちよこつとずつ抜き取るというバイトを一生懸命して、お金を貯めました。

そしていよいよエレベーターアクションのファミコンの発売日がありました。

その日は学校があったので、学校が終わってから買いに行っただんじや絶対売切れる、と思った僕は、その日幼稚園が休みだった弟に、「おばあちゃんと一緒に朝10時に駅前のおもちや屋へ行ってエレベーターアクション買ってこい。」と言い、おばあちゃんにお金を預けました。おばあちゃんは、「このお金どうしたの?」と聞いてきたので、「この前家に来た親戚のおじさんにもらったと嘘を言い、おばあちゃんを軽く説得しました。」

その後僕は学校に行きましたが、授業中も主人公がロープでスルスルと降りてくるオープニングのシーンが頭の中で駆け巡り、完全に上の空でした。そしていよいよ学校も終わり、僕はタッシュで家まで帰りました。家に着きゲームのある部屋に入ろうとすると、聞き慣れないゲーム音が聞こえてきました。「弟のやつ、早速やってやがるな。」と思いい部屋に入りました。

おや?

テレビを見た僕は、どうも様子がおかしいことに気づきました。確かにエレベーターアクションは縦スクロールのゲームのはずなのに、テレビ画面に流れる映像が横スクロールしています。

確かエレベーターアクションのフィールドは全てビルの中のはずです。なのに、草原が映っています。「はは、ん、ファミコン版は面が進むと外に出て主人公が草原を跳ねたりするのか」と思いましたが、僕の目がファミコン本体に行っただ時、異変に気づきました。本体には見たこともない赤いカセットが差し込んであります。

僕は「タイトーのカセットは全部黒のはず。なのに、赤?」と思いい、横に目をやると、無造作に放られた空き箱、そして大きく『フォーメーションZ』とタイトルが書かれています。何度見ても、『フォーメーションZ』と書いてあります。僕は何が起こったのか分からず、目の前でゲームをやっている弟に、「おい、おい。なんだよこれ?」後ろから問いかけてました。弟は無言でフォーメーションZらしきゲームをやり続けています。僕が何回か弟に聞きだしていろいろうちにおばあちゃんが部屋に入ってきました。「どうしたんだい?」

「おばあちゃん、おばあちゃん、何これ?あの子、僕は頼んだエレベーターアクションは?」  
「Aちゃん弟がこっちの方が面白って言うからこっちにしたのよ。」

それからどれくらい間があったのか覚えていませんが、僕は僕でなくなっていました。

「ふざけてんじゃねーっ!」  
僕はゲームをやっている弟の頭を後ろから思い切りはたき、ものすごい勢いでファミコン本体へ手を伸ばし、イジェクトレバーを押さずにカセットを引っこ抜きました。そしておばあちゃんに「今すぐ店行ってエレベーターアクションを取り替えてこい!」と言って、赤いカセットをおばあちゃんに渡して思い切り投げました。当たり前。首から上。

ガツツという音がして、その後おばあちゃんはずくまに赤いものが見えます。

僕は最初、カセットの塗料が落ちてこぼりついたんだと思いい込もう、思いい込もうとしましたが、頭血です。それからどうなったのかを、本当にきれいに覚えていません。

が、夜、親にさんざん怒られたのと、泣きながら『フォーメーションZ』をしばらくやっていただけは覚えてます。

## PC98

今から25年前の夏休みに、NECのPC98が当たる迷路ゲームに応募した。

絶対に当たったという確信があった。ついにパソコンがうちに来るんだと待ち遠しかった。どんな迷路ゲームだったかという、迷路の途中のマスに得点を書いてあり、ゴールに着くまでに何点取れるかというもので、応募者の中から得点の多い順に商品が決まり、一位になれば確実にパソコンがもらえるというもの。マスの得点には+1、+2、のプラスの他にx2、x3の掛け算のマスがあった。

俺はあることに気づいた。掛け算をなるべく後で取ればとるほど点が上がる。

+1、x2、+3の順で取るより、(5点)  
+1、+3、x2の順で取ったほうが点が高い。(8点)

極端に言えば、プラスのマスは全部通った後に、掛け算のマスは全部通れば最高得点が出るはずだ。それなので、いかに掛け算のマス後にまわすかということに集中してルートを考えれば良いわけだ。

ゴール側から掛け算のマスはすべて通るルートを考えて、スタート側からはプラスのマスはすべて通るルートを試行錯誤した。どうしてもうまくいかない部分も発生したが、掛け算を犠牲にする場合は低い数字のものにして、高いプラスのマスはなるべく掛け算の前に置くように考えた。結果、31万点取れるルートで決定した。注意書きに、得点が間違っていると失格になると書いてあったから何回も検算した。ボールペンで何回も書き直したため修正液だらけになったが、切手を貼って送った。

もうすぐパソコンが来るという自分の中で予定も立っていたがなかなか来なかった。結局こなかった。あのルート以上の点数を叩きだしたやつがいたのか。

パソコンどころか2位3位4位の商品も何も送られてこなかった。たしか100位くらいでも粗品のようなものがもらえたと思っただけ、一切なにも。もしかして、得点が間違っただけ失格したのか。いや、それはない。

大人になって考えてみると、当たらなかった理由はすぐに想像がついた。

掛け算は直前の値にしか効かないのではないか。想定されていたのは、100点とか200点とかその程度だと思っただけ、31万点ってどうやって計算したのって思っただろうな。

この出来事は宝くじ以上に夢があった。

## せきぬの章

白と茶色のコントラストの鮮やかなこと。

ゴム床の綺麗なトイレ内で和式にOBがあった。

少しも枠に入っていない。完全にOBしている。限界つぶりがかげえる。この様子だとスポンも汚したに違いない。

公園や駅の場合、ぎりぎりまで我慢して駆け込む場合が多い。ためこなることがよくあるが、会社内でこなるという例はあまりないが、それには2つ理由があった。1つは今、建物の上へ行くための階段の西側のトイレが工事中で全員が東側に行かなければならない。西側から東側へ行くためには100mは歩く。そうなる全員が片側に集まるのだから自然と数が足りてこなる。

もうひとつは、東側は工事が終わってウォッシュレットの最新型が1つ追加されたことから、長便者が続出していることが満室の原因となっている。

行ってみたら満室、それがいちばんつらい。精神力の無いものはその一撃でOBどころかそれ以上の惨事を招くことになる。仕切りなおして尻を締めて上の階、上の階と空を探す旅をしなければならぬ。OBも和式にあったことから洋式が満室だったことは想像に難くない。

OBはまだ柔らかそう。犯人はまだ遠くへはいっていない。ホヤホヤのOBを見た俺は同情した。残念な思いをした人間がこの近くにいる。

普通の人間なら見なかったことにするだろう。掃除のおばちゃんやでなければ99.9%素通りだ。ティッシュを幾重にもしてブルドーザーが盛り土を押し運ぶように縁からOBを落とす。

幸い鮮度が良かったためこびりつかず簡単に処理できた。そして少々残った輪郭さえも水を垂らして消してやった。今犯人は申し訳ない気持ちでいっばいのはずだ。だからOB犯は必ず犯行現場に戻ると確信している。

なるべく人には見られたくないから早く掃除のおばちゃん片づけてくれと切に願っている。いつ片づけられるか確認したくてたまらないんだ。

そして、犯人がOBを確認しに行った時、その状態をみて頭が混乱している様を想像しただけでわくわくしてくる。掃除のおばちゃんが入っていないのに、OBがなくなっているのだから。

飲み物を飲み終わった俺もまた犯行現場に戻ってみることにした。混乱した犯人がOBを片づけた者へのメッセージを残しているかもしれないから。現場に入る直前にすれ違っただけで色白の病弱そうな男が俺の顔を数秒見た。

こいつとすれ違っただけ3回目くらいだ。個室の壁を確認したがメッセージは何もなかった。また1、2時間後に見に来るとする。

少し仕事をしかけたところで見落とすに気づいた。扉の裏を確認するのを忘れていた。一刻も早く確認しなければならぬと思いいすぐに現場に戻った。

個室に戻り扉を閉めた。やはり。

「よけいなことしやがって」

